

ぶっきらぼうな彼女

「将来？ 別に、やりたいことはないです」

そう言って、彼女は机に頬杖をついたまま、視線を動かさなかった。
国語の時間だった。読解課題に向き合っていたが、答えは空欄が多かった。

「難しい？ それとも、興味ない？」と聞いたときも、彼女はただ一言。

「努力しないと読めないんで。」

そうして、また黙った。

*

他の先生たちと話していると、必ず彼女の名前が出る。

「努力の人だよね」「感情を表に出さないから、つかみづらい」「でも結果は出す」

そう言われるたびに、私は少し違和感を覚える。

評価されているのに、評価されきっていないような。

彼女自身が、その評価をどこかで拒んでいるような気がするからだ。

*

彼女は“やるべきこと”はやる。

課題も、小テストも、ノートも。

でも、“やりたいこと”には沈黙している。

その沈黙が、私はずっと気になっている。

一度、誰かが彼女に「将来どうするの？」と聞いたことがあった。

彼女は、少しだけ間を置いて答えた。

「……どこかには、行くと思います」

それだけだった。

*

周囲の教師たちは、彼女のそのぶっきらぼうさに戸惑っている。

「感情がないわけじゃないけど、読めないよね」と誰かが言った。

けれど私は、あのとき見た彼女の目を覚えている。

一瞬だけ揺れた、ほんのわずかな濁り。

それを、誰かが「空白」と呼ぶなら、私は「迷い」だと感じた。

*

彼女は、国語が得意ではない。

だけど私は知っている。

たとえば、本文の一節に「だが、それは言葉にならなかった」と書かれていたとき、

彼女は黙ってその部分を何度も読んでいた。

指が、そこだけ何度も往復していた。

それだけで、十分じゃないか——と、私は思う。

*

きっと彼女は、世界を読むのに、人より時間がかかる。

でも、それは彼女が「遅い」のではなく、

「丁寧に読もうとしている」だけかもしれない。

そんなふうに思えるのは、

私がもう、若い教師ではなくなったからかもしれない。

評価も、指導も、スピードも、もう完璧にはできない。

だからこそ、私には見えるのかもしれない。

彼女が、「ただそこに座っている」姿の中に、

膨大な努力と、言葉にならない迷いがあるということが。